



Hakuai Story

博愛物語

新たな夢に向かって（Ⅲ）

—前代未聞の大移転—



移転への道。その深山を彷徨^{さまよ}う如き針路には、切り立った峻崖が幾重にも立ちはだかっていた。

まず、目指さねばならない高峰は、新天地の選定だった。その候補地として、近傍の高台に位置する用地（現在地）が俎上に載ったが、一時は、多額の造成費用に断念を余儀なくされた。だが、突如、吉祥の風に乗って浮上した隣地の開発計画によって、大掛かりな土石の搬出やその後の造成に要する費用が大幅に削減され、この地を有力な移転候補地として見据えることができた。移転計画が成就に至るか、否かは、漠とした俥であったが、病院の近隣でなければならない条件を満たした候補地の存在自体が大きな意味を持った。

日没前、刻一刻と移り変わる日照の微妙な陰翳が作り出す新天地の晚景を、真向かうU中学校の敷地から目でなぞっては、時の経つのも忘れていた。移転計画の前途は、未だ遼遠な^{もの}道程ではあったが、何としても、この地に、病院を移転さ

せなければならなかった。

「移転の実現なくして、博愛会の明日はない」。

そんな強迫観念にも似た執着^{おもい}が支配していた。

見上げると西空を染める夕焼けが、
希望の新天地を包摂して絵画のように
燃え立っている。空の^{ほのお}焰に映え立つ



新天地は、その距離を縮め、手が届きそうにも思われた。

新天地の売買条件を煮詰める為、敷地に関する資料や近隣の売買価格の事例などを広範に収集した。

とうじ
往時、80年代後半から続く^{バブル}泡沫経済は、全国の地価を青天井と言われるほど高騰させ続けていた。福岡市もその例外ではなかった。^{バブル}泡沫経済の終焉に向う時期は、首都圏の飽和状況の中、寧ろ、地方都市での土地取引を、一層、加熱させていた。数週間に及ぶ情報収集と検討の結果、初期投資額の全貌が明らかになって愕然とした。

移転に要する費用は、土地の買収費用、建築設計や建築費用、運転資金などを合わせると概算ではあったが、総額 60 億円に迫る金額だった。現在でもそうであるが、この金額は、^{もの}往時の財務内容に照らし合わせると天文学的な数字だった。^{とうじ}この巨額の資金を、どうして調達するというのか。

正に、立ちはだかる巨大な峻崖を前にして、独り立ち竦んでいた。所詮は、^{とうろう}蟻螂の斧でしかないのか。無理かもしれない。いっそ諦めたら…。移転の実現に懐疑的な気分すら湧き上がって来た。

^{とうじ}往時、気概だけで書き留めた「資金調達に関するメモ」が、今も手元に残っている。その内実は、皮算用の^{もの}欄ばかりで、^{すうじ}根拠に乏しい調達先の名称と金額が埋められ、その合計の欄には、^{ちょうづら}帳面合わせの 10 桁の総計が記載されている。無論、空虚な数字ではあるが、切迫した気概が感じられ懐かしい。

^{づくり}資金調達の苦しみは、創設の頃からの慣例だった。これま

で喫緊の要事でも力を尽くして何とか凌いできた。だが、この移転に必要な金額は、その調達能力を遥かに超越している。整然と 10 桁を埋めた数字に怯臆の思いすら湧き上がる。奇跡でも起こらない限り、この 60 億円の調達は不可能に思えてならなかった。

何か、手立ては無いのか。移転の実現を期するには、この投資額の数字に生気を注入し、現実の^{もの}調達としなければならない。資金の裏づけなくして移転の実現など有り得ない。資金調達は、移転の成否を決定づける絶対的な^{もの}要件だった。

油山観光道路から見上げる新天地は、移転事業の進路を暗示するかのように切り立った丘陵が景観を遮って、大量の土砂が重い質感を以って眼前に迫ってくるのだった。

著者 那須 良昭

発行所 医療法人財団 博愛会

〒810-0034

福岡市中央区笹丘 1-28-25

tel:092-741-2626 fax:092-741-2627

本書に記載されております文書につきましては、転載・無断使用を禁じます

